# 立ヶ花遺跡発掘調査報告書

市道学校牛出線拡幅改良工事に伴う
埋蔵文化財発掘調査

－2001.3－

長野県中野市教育委員会

# 立ヶ花遺跡発掘調査報告書

市道学校牛出線拡幅改良工事に伴う
埋蔵文化財発掘調査

－2001.3－

長野県中野市教育委員会

## ＜　刊行にあたって　＞

本調査報告書は市道学校牛出線拡幅改良工事に伴う立ヶ花遺跡の発掘調査報告書である。立ヶ花遺跡は古くから縄文時代前期の遺跡として知られている。したがって、本調査にあたって、多くの縄文時代前期の住居址等が検出されるものだと考えていたが、実際に調査したところ、縄文時代の遺構は全く出土せず、僅かに土器片が出土したのみであった。

おそらく、市道学校牛出線拡幅改良工事にかかる部分は集落の東端にあたるものと考えられ、遺跡の中心はもう少し西側にずれるのであろう。今回の調査で、立ヶ花遺跡の東端を確認できたことは立ヶ花遺跡のあり方を知る上で大きな成果のひとつであると考えている。

今回の埋蔵文化財調査にあたっては、関係諸機関や地元住民の皆様にご理解とご協力を賜った。厚く御礼申し上げて、刊行の言葉としたい。

平成13年3月31日

長野県中野市教育委員会
教育長　宮 川 洋 一

## ＜ 例　言 ＞

1　本調査報告書は中野市道学校牛出線拡幅改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書である。

2　発掘調査は中野市学芸員中島庄一の指導監督のもと、竹田保夫が行った。

3　調査報告書発刊に関わる整理作業、報告書執筆は学芸員中島庄一の指導監督のもと竹田保夫が行った。

## ＜ 目　次 ＞

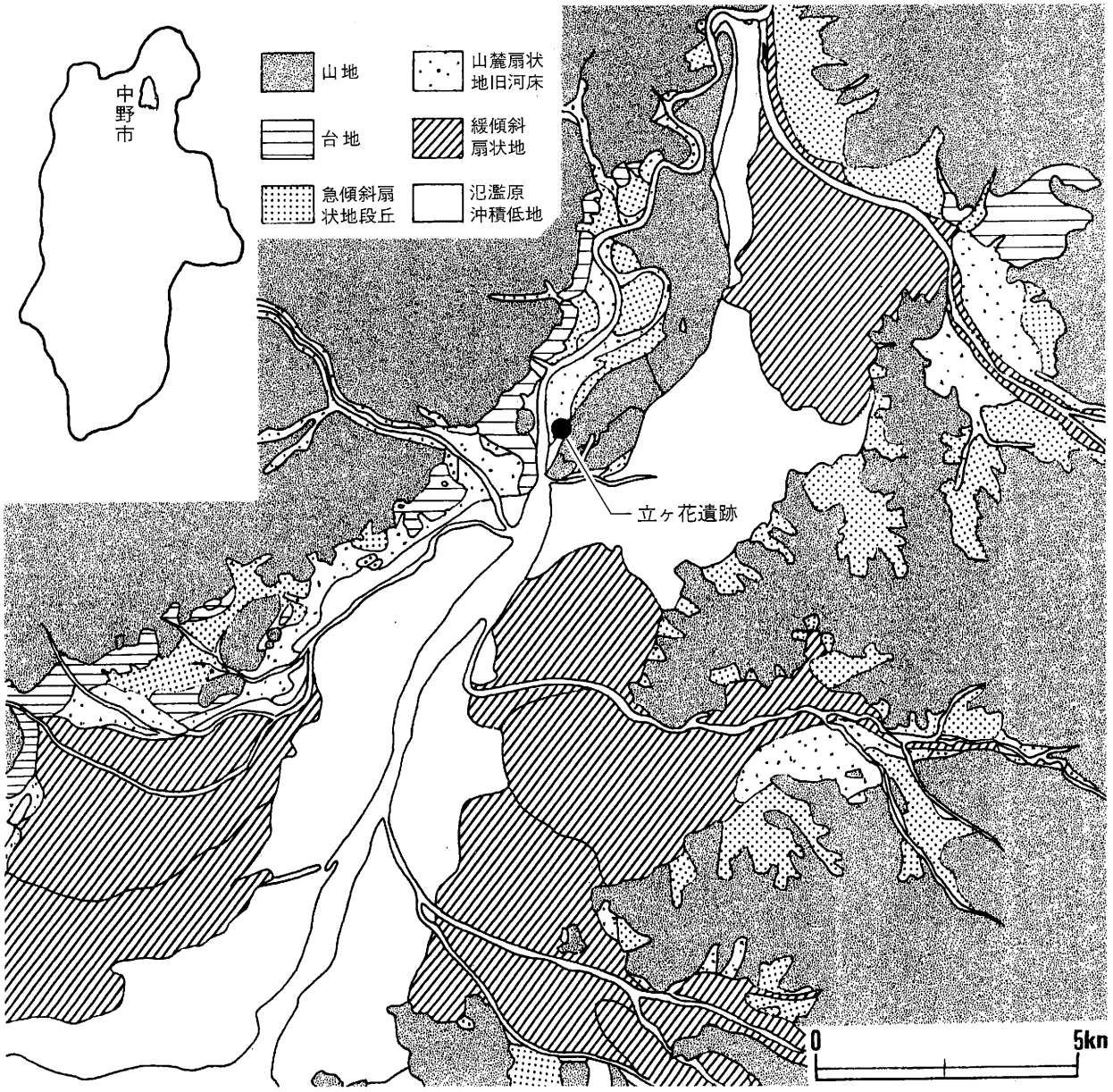

1　位置と立地 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　1
2　調査方法と基本層序 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　4
3　出土遺物 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　4

## 1　位置と立地

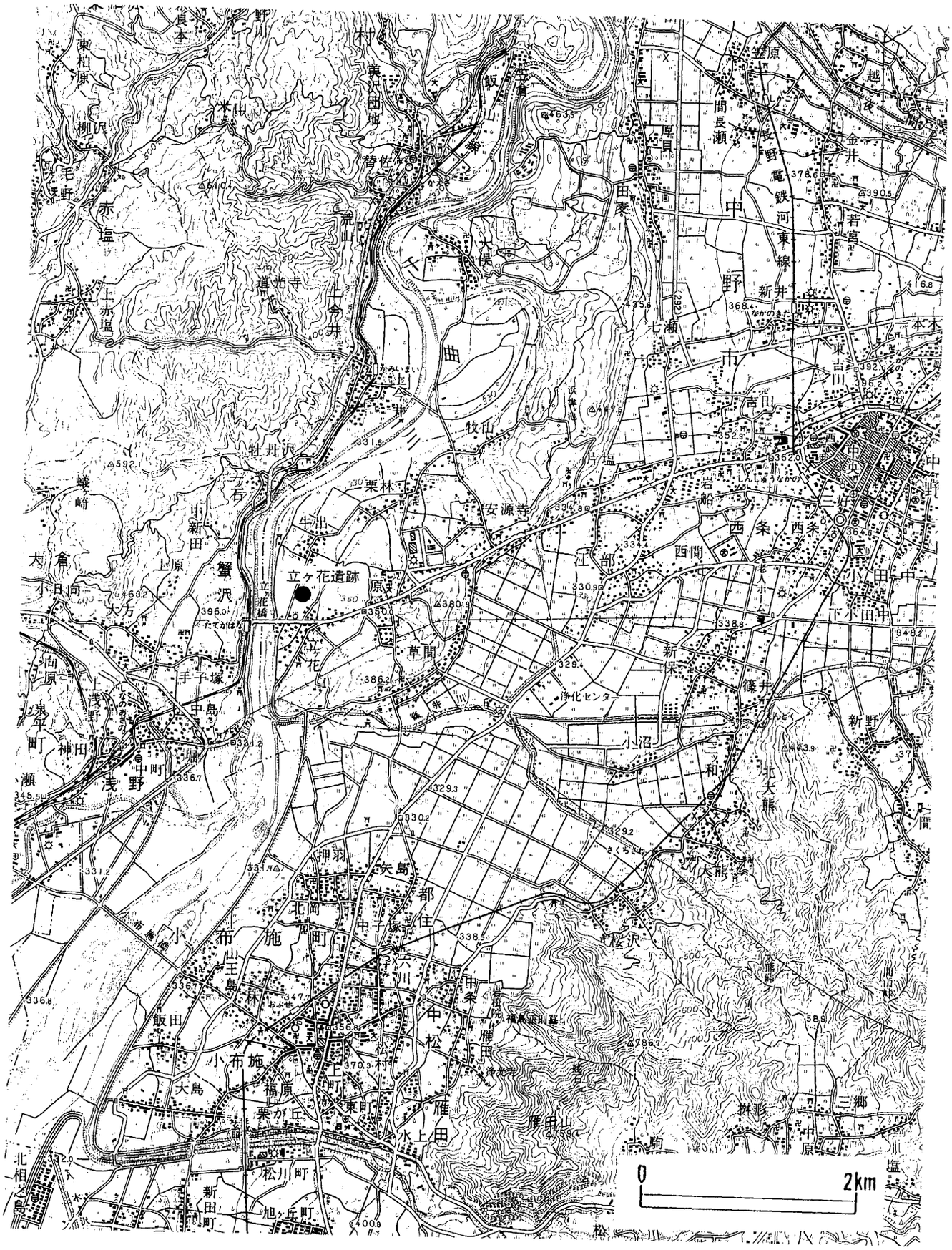
中野市は長野盆地の最北端に位置し、長野盆地の北側に位置する飯山盆地と隣接する。長野盆地は中部高地最大の盆地で、南北に長い紡錘形状を呈し、ほぼ中央を千曲川(信濃川)が北流する。盆地の東西を画する山地は西部山地、河東山地と呼ばれ、新潟・群馬両県との県境となっている。盆地の低地部には自然堤防と東西の山地から流入する河川が形成する扇状地が発達する。

中野市は長野盆地の最も北に位置する典型的な扇状地地形上(中野扇状地)に位置している。中野市の地形は大きく山地、扇状地、盆地底部、丘陵に区分され、東の河東山地から流入する夜間瀬川が形成した扇状地地形が市域の大半を占め、河東山地から広がる扇状地の先端は西部山地の裾部に形成された高丘・長丘丘陵に接する。高丘・長丘丘陵と西部山地の間を千曲川がかん入し、西部山地と高丘・長峰丘陵を南北に切り離している。

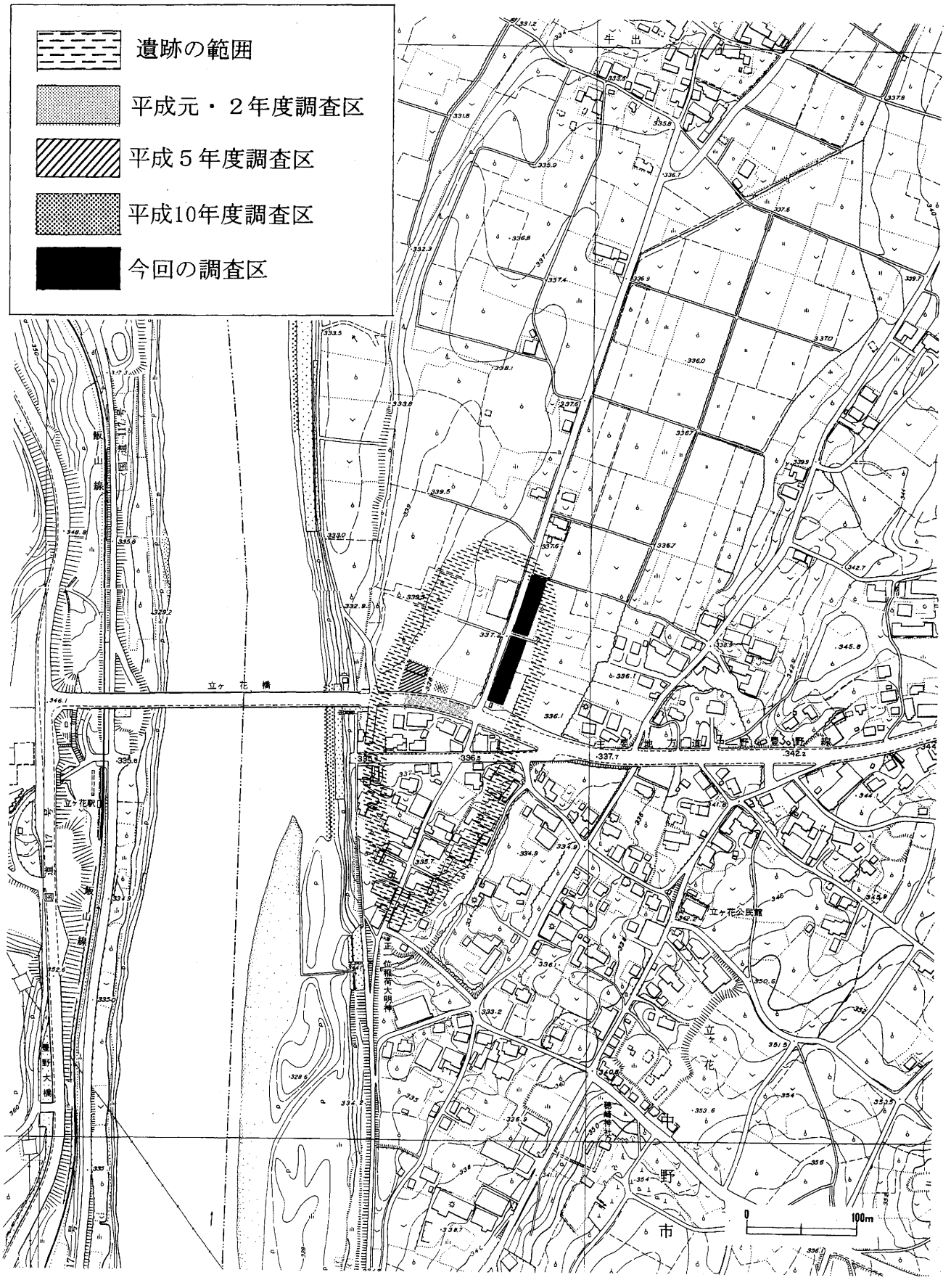
遺跡は西部山地と高丘・長峰丘陵の間を流れる千曲川によってつくられた東側河岸段丘面上に形成された自然堤防上に立地する。




第1図　遺跡の位置(1)




第2図　遺跡の位置(2)

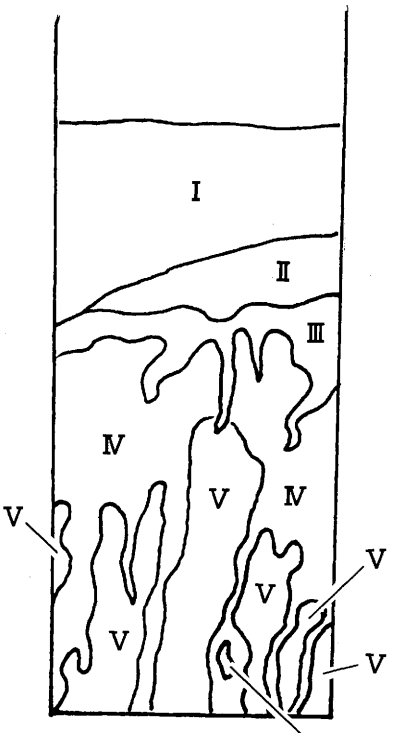



第3図　遺跡の範囲と調査区

## 2　調査と基本層序

本調査区の基本層序は表層から、第Ⅰ層：耕作土、第Ⅱ層：黒色土（砂質）、第Ⅲ層：灰黒色土（砂質）、第Ⅳ層：黄色粘土質層、第Ⅴ層：黄色土に灰白色の土壌が斑状に混入し、強い粘性をもっている、の５層に区分できる。

調査は重機を用いて、第Ⅰ層、第Ⅱ層、第Ⅲ層を慎重に掘り下げ、第Ⅳ層の上面を露呈させ、遺構の検出作業を実施したが、縄文時代の遺構は検出されなかった。また、旧石器時代の存在を調査するため１×１ｍの試掘ピットを６箇所もうけたが、旧石器時代の遺物は確認されなかった。

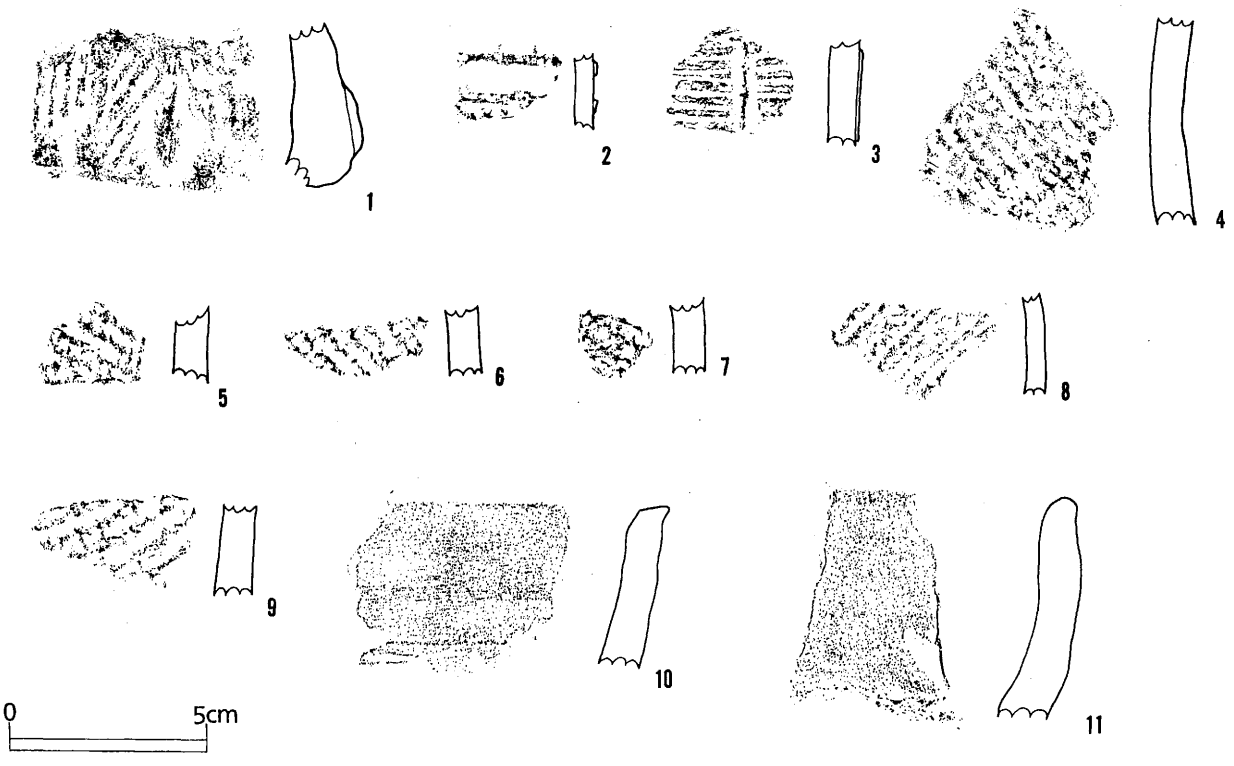


第4図　基本層序

## 3　出土遺物（第５図）

１は深鉢の底部破片である。細かな半裁竹管による集合沈線文を地文とし、円形貼付文と棒状突起が付されている。色調は暗褐色。胎土は細粒を含みややもろい。内面は黒色を呈する。２は縄文を地文にし、二本の浮線文が並行して付されている。色調は褐色。３は細かく、鋭い並行沈線を地紋として、細い棒状突起が縦方向に施文される。４から９はいずれも斜縄文が施文されるものである。

なお、10、11は平安時代の甕形土器の口縁部である。



第5図　土器

立ヶ花遺跡発掘調査報告書

印　　刷　　平成13年3月31日
発 行 日　　平成13年3月31日
編集・発行　　中野市教育委員会
　　長野県中野市三好町１－３－19
印 刷 所　　㈲高錦堂印刷